

村落社会と社寺と墓地

両墓制概念の克服：奈良県都祁村吐山の事例分析より

新谷尚紀

Village Society, Shrine and Temple Graveyards

はじめに

- ①学術調査と吐山
- ②現在の村落運営
- ③神社と寺院
- ④葬儀と供養
- ⑤村落と墓地
まとめ

[墨文解説]

本論は奈良県都祁村吐山という村落の民俗調査をもとに「当屋制村落」と「両墓制」という二つの概念についての再検討を試みたものである。学問が提示する操作概念は一定の有効性を發揮したのち、新しい研究視野が開拓されることによって逆にその限界性が認識されてくるのが必然である。しかし、蒲生正男による「当屋制村落」という概念ははじめから吐山の村落運営の分析から帰納することには無理があった。そして、宮座祭祀の場におけるトウヤという民俗語彙から抽象化されるのは「当屋制」という概念であり、それは「座株制」とともに宮座研究の基本概念として現在もなお有効である。「両墓制」という概念は、墓地に埋葬墓地と石塔墓地の二種類があるということを発見し、死體忌避と靈肉別留という二つの觀念を具体的な墓制の中に見出した第一段階、葬送墓制の歴史の上で石塔という要素が相対的なものであり、單墓制と両墓制とは石塔以前の埋葬墓地に対する石塔という要素の付着の仕方によって分かれた変化形であるという視点を得た第二段階を経て、研究は新しい第三段階へと進むねばならない。それは、具体的な地域社会における石塔建立と石塔墓地設営の初現期以来の歴史的過程の追跡を不可欠とする段階であり、石塔建立という営為がきわめて個人的営為であり、石塔立地に作用するハカ（埋葬墓地）、テラ（寺堂）、イエ（住居）の三者の吸引力と反撥力との組み合わせにより、地域社会内部において多様な石塔立地が歴史に刻まれている過程を直視し、両墓制と單墓制という概念を相対化する段階である。以上の見地からこの事例研究により指摘できた点の一部をあげれば以下の通りである。この事例における石塔建立の初現は天文十三年（一五四四）の天台僧一如尊堯の五輪塔、天文十七年（一五四八）の春譽禪定尼の舟型光背五輪浮彫塔、永祿九年（一五六六）の吐山日向守光政の板碑型石塔であり、それ以降中世末から近世への移行期に断絶することなく石造墓塔の建立が継続されたが、この時期には各垣内ごとに永祿年間（一五五八—一五七〇）を中心として、念佛講衆や庚申待一結衆によって続々と地蔵浮彫碑や六字名号碑が建立されてくる動きがあった。そして、同じ吐山であっても、墓地によって石塔建立の開始時期には大きな差異があり、両墓隣接型を形成した春明院墓地のそれは異常に早く十六世紀後半、同じく両墓隣接型を形成したドサカ墓地では十七世紀半ばに定着している。それに対して、單墓制を形成した城福寺のムシロデン墓地や典型的な両墓制を形成した仏法寺や地蔵院の石塔墓地では約半世紀遅れて十八世紀に入つてからであった。そして、垣内の共同利用規制のもとにある同じ埋葬墓地の利用者であっても、石塔の建立と石塔墓地の設営とは家ごとの選択が可能であり、それは地域社会内部において展開した家ごとの系譜意識の自己表現の一つの形式でもあった。